

令和3年度 実践研究奨励援助事業採用校・研究主題等一覧

学校課題研究

	園名・校名	園長・校長名	代表研究者	研究主題
【こども園・幼稚園】				
1	認定こども園犬伏幼稚園	奥澤雅之	同左	自然体験を通して道徳性をはぐくむ支援のあり方 ～蚕飼育の自然体験を通して、生命の不思議さや尊さに気付かせる～
2	(認)みどりこども園	岩本眞砂枝	同左	認定こども園における支援が必要な園児への音楽療法を用いた取組み ～特別にプログラムされた音楽活動に楽しく参加して感性の調和を図り、インクルーシブ教育の実現を目指して～
【小学校】				
3	栃木市立国府南小学校	塩田裕子	同左	コンポスト活動を中心としたふるさと学習の充実をめざして ～地域と共に未来を生きる子どもたちにSDGsの視点を～
4	日光市立今市第三小学校	本間和敬	同左	「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善 ～ICTの活用を中心として～
5	栃木市立赤麻小学校	印部稔	同左	「わかる!」「できる!」を楽しみながら、考え表現する力を高める授業の創造 ～ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善を通して～
6	鹿沼市立北押原小学校	臼井孝行	同左	「よりよい学級・学校生活をつくろうとする児童の育成」 ～学級会の実践から広げて～
【中学校】				
7	宇都宮市立城山中学校	新村雅司	同左	SDGsへの取組による主権者教育の推進 ～地域の課題解決を主体的に担う力の育成～
8	鹿沼市立南摩中学校	大貫雅子	同左	「『考え、議論する道徳科』の授業づくりと、評価のあり方の工夫」 ～今日よりも明日に向けて、よりよく生きようとする生徒の育成を目指して～
【高等学校】				
9	栃木県立那須清峰高校	薄羽正明	同左	県立学校におけるGIGAスクールタブレットの効果的な活用方法 ～ひとり1台にならない運用上の課題の対応方法～
10	栃木県立日光明峰高校	吉川孝昭	同左	生徒・保護者・地域との協働による学校の魅力化・特色化の一層の推進とスクール・ポリシー策定に向けての研究

研究主題 自然体験を通して、道徳性をはぐくむ支援のあり方

～ 蚕飼育の自然体験を通して、生命の不思議や尊さに気付かせる～

園名 学校法人犬伏学園 認定こども園犬伏幼稚園

園長名 奥澤雅之

1 研究目的

園では、これまで毎年2歳児クラスから5歳児クラスまでの教室で、蚕を卵から飼育して、蚕の成長を見守るという活動を実践してきた。しかし、近年若い保育者も増えてきて、蚕飼育の導入の経緯や目的、蚕の生態等を十分理解しないで、子ども達の保育を行ってきた部分も見られる。そこで、蚕飼育を通して子ども達の成長を支援するような活動が十分にできるよう、保育者の研修も含めて、子ども達への発育年齢に沿った効果的な蚕飼育の体験活動の支援について研究を進める。

2 研究内容

3歳児から5歳児のクラスでは、各年齢に合わせて飼育方法を見直し、目標を立てて取り組んでいった。

3歳児クラスは、「飼育観察を通し、動植物に愛着を持つ」を目標にした。ねり餌で飼育をし、虫にも命があることを知るため、排泄物の交換時や餌やり時に蚕に触れながら声かけを行った。

4歳児クラスは、「飼育環境による成長の違いに気づき、命があることを意識する」を目標にした。ねり餌と桑の葉の二種類の方法で、当番の子どもが餌やりを担当し、帰りの活動で蚕の成長を通して感じたことを、みんなの前で発表し共有した。

5歳児クラスは、「去年の経験を振り返り自ら意欲的に飼育に取り組むことで自ら命の大切さに気づく」を目標にした。グループごとに桑の葉で蚕を飼育し、一週間ごとに

絵で表現したり、自分で感じたことを文字で書くことを行った。

3 研究成果

飼育した結果、3歳児クラスでは、蚕の世話を一緒に行うことにより、強く掴むと死んでしまうことや餌を食べたり、排泄するという様子を見て虫にも命があるということに気づいた。また、蚕の幼虫から蛹、蛾になるの変化を見て、虫が成長する姿を知り、子ども同士で「この芋虫は蝶々になるのかな？蛾かな？」といった会話をする姿が見られた。飼育経験があったからこそ、子ども発信でツマグロヒョウモンを育て、蝶になる姿を見ることができたり、経験が広がった。今後も続けていきたいと思う。



(蚕のお家の掃除を子ども達と一緒にやる)

4歳児クラスでは、ねり餌は蚕に必要な栄養が十分に含まれていることもあり、桑の葉で育てている蚕よりも丸々と成長し、四日ほど繭になるのが早かった。成虫になった姿や繭の質には差が見られなかったため、飼育環境の違いによる成長の気づきは少なかったように感じた。「うねうねして気持ち悪い」と言って怖がっていた子も「綺麗な蛾

になってね」と関心を持つ姿が見られた。今後は、蚕の命だけでなく、どんな生き物も大切な命であることをしっかり伝え、関わり方を考えていく必要があると感じた。



(蚕をみんなで触ってみよう！)

5歳児クラスでは、今年初めて観察日記を取り入れた。蚕をよく観察し、「つるつるしているね」と見た目だけでなく、感触など細かな部分まで観察し、描くことができた。しかし、文字を書くことが難しい子もいるため、今後は様々な動植物の観察画を描いていきたい。また、「蚕の繭は糸が取れるんだね」などの発言もあり、実際に絹でできた手袋などを見せ、繭から絹糸が取れて、洋服などになることを知ることができた。



(顕微鏡で蚕の生態を見てみよう！)

4 今後の課題

各学年で様々な研究結果も出たため、今回の反省点を改善し、良かった点を生かしながら、更なる課題を見つけ、これからも、子ども達の興味関心から生命の不思議や尊

さに気付いていけるような保育を展開していきたい。また今後、新しく入ってくる保育者にも、蚕の生態や蚕飼育の導入の経緯・目的をきちんと伝えて、よりよい子どもの保育・教育に生かしていきたい。

研究主題 認定こども園における支援が必要な園児への音楽療法を用いた取り組み
 ~ 特別にプログラムされた音楽活動に楽しく参加して感性の調和を図り、
 インクルーシブ教育の実現を目指して~

園名 学校法人岩本学園 認定みどりこども園

園長名 岩本 眞砂枝

1 研究目的

音楽療法とは、音楽のもつ生理的・心理的・社会的な特性を用いて、心身の回復、機能の維持改善、障害の軽減などの目的のために、音楽を意図的・計画的に活用する療法である。

本園では支援が必要な4名の園児が在籍している。園児それぞれの個性の中に、特有の表現や思いをくみ取り、コミュニケーションの難しさを少しでも軽減し、集団での活動に活かしていくことが必要であると思われる。そのため援助として、音楽療法を実践したいと考えた。一人ひとりの特性を考慮し、特別にプログラムされた音楽活動に楽しく参加して、社会性・協調性を高めていくことを目標とした。

2 研究内容

楽器活動

楽器活動を通して自己表現を促し、情動の発散と安定、集中力の持続、力のコントロールを目指した。

楽器を媒介として、他児やセラピストとのコミュニケーションを体験し、社会性や協調性を養うことを目指した。

歌唱活動

対象児のことばの発達度に合わせて、それぞれ異なる目標を立てた。

声を出そうとする意欲を引き出すために、ペープサートやパペットを使用した。

身体活動

音楽に合わせて歩いたり走ったり、また音楽が止まったら動きを止めるなど、集中力と即時反応力を養うことを目指した。さらに、ミュージックパッドやバランスストーンを使用し、身体機能の向上を図った。

3 研究成果

1カ月に2回の定期的な音楽活動を通して、大人との信頼関係の構築・ルールを守ることで楽しい時間が得られること・他児に楽器や順番を譲ることで相手から感謝される喜びを経験し、自身の優しさの気持ちを行動に表すことで

達成感も得られた。また、表現することの楽しさを知り、他者から称賛されることで喜びを感じ、自己肯定感を高めることに繋がったと考えている。

自分という「個」の世界に音楽を取り入れたことで、楽器を使用して楽しく表現する。その時の感情を表出する手段として利用する。他児の存在を知る。他児の表現に注視する。他児の存在を認め一緒に楽しむ、と時間をかけて「他者との関わり」に対して良い変化が見られた。

楽器活動

楽器の様々な操作によって出る音の違いに気づき、その変化を自分で創り出して楽しむ。力のコントロールの意識へと繋がった。

他児やセラピストの表現する音を意識し、一緒に楽しめたことで、少人数ではあるが社会性や協調性に繋がる感覚を養う一助となった。

歌唱活動

発語がある対象児は、より明瞭な発音を意識し、集中して取り組む姿が見られた。発語が難しい対象児は、発声のタイミングで表情の変化やジェスチャーで表現するに留まった。

身体活動

個性による運動能力の差はあったが、それぞれが音楽に合わせて行動し、集中力の向上が見られた。

4 今後の課題

タイプの異なる対象児 2~3名の小グループ活動のため、対象児の特性・得手不得手分野にばらつきがあり、対象児全員に均等な課題や目標を持たせた内容を組み込むことが難しかった。その点を踏まえ、個々に合わせたプログラムを考えた上で、同じ楽器を用いても別の使用方法を取り入れる等の工夫が必要である。

コロナ禍で保護者参加は難しかったが、報告書だけでなく保護者参加プログラムを実施し、音楽療法を知ってもらおうと同時に、本人の自己表現が身近な存在から否定されないことの大切さを知ってもらおう機会を増やしたい。

研究主題 コンポスト活動を中心としたふるさと学習の充実をめざして
 ~地域と共に未来を生きる子どもたちに SDGs の視点を~

学校名 栃木市立国府南小学校

校長 塩田 裕子

1 研究目的

コンポスト活動を中心に、全校児童・教職員や保護者、地域との協働活動を通して、多様な取組を知り視点を広げると共に、自分を取り巻く社会の課題を自分のこととして捉え、課題解決に向けて探究する力を身に付け、将来にわたって自立できる児童を育てる。

2 研究内容

(1) 定期的な集会や授業

年2回実施のオープンスクールや夏休みのサマーチャレンジスタディでは、外部講師によりSDGsについての講話やクイズ形式の集会の実施、コンポストに住む微生物を顕微鏡で観察する活動を実施した。定期的な活動の実施により、児童の知識や理解を深めている。



【SDGsについて】



【コンポスト観察】



【微生物探究授業】

(2) 実践

緑を守り隊での緑化活動では、地域の方々や団体との協働活動で、



【地域協働緑化活動】

グリーンベルトにルピナスの苗を植えたり、プランターに花苗を植えたりした。



【環境問題の発表】

また、総合的な学習の時間では、SDGsを意識した課題解決学習に取り組んだ。

3 研究成果

コンポスト活動を中心に据えてSDGsについての集会を定期的実施したり、様々な活動を関連付けて実施したりしたことで、身近な環境への視野の広がりや自分自身の生活の見直し、自分を取り巻く社会の課題への気づき等、児童の意識の高揚が見られた。

地域とのつながりが深まり、学校に対してのかかわりが促進されると共に、世代を超えた交流を通しての児童の価値観や多様性への理解の広がりが見られた。

単発ではなく、年間を通した一連の活動の流れが明確になり、持続可能な取組として6年間の長期的な活動を通しての児童の豊かな心の醸成が目指せ、教育目標具現化への布石となった。

4 今後の課題

将来にわたって意識できるSDGsの視点の涵養を図るため、地域と協働した現在の取組が継続できるように人的・物的資源を継承する。

マネジメントの視点で、取組の質的深化を図る。

研究主題 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善～ICTの活用を中心として～
学校名 日光市立今市第三小学校
校長名 本間 和敬

1 研究目的

GIGA スクール構想により、新たな学校のスタンダードとして、1人1台端末環境での学習が開始されることになった。そこで、子どもたちが将来生きていく Society5.0 時代を見すえ、ICTの活用を通して「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図っていきたく考えた。

2 研究内容

(1) 福井大学・小林和雄先生による「主体的・対話的で深い学び」オンライン研修 (R3.8.24)

仮説が分かれる「てこ」の実験を行いその結果について職員同士で考察することによって、専門性をふまえた質の高い課題について深く学ぶことができた。

(2) 第1回研究授業・授業研究会 (R3.9.29)

【2年・算数「さんかくやしかくのかたち」】

子どもたちは、タブレット画面上の角や辺に三角定規を当てて正方形か長方形かその他の四角形かを判別し仲間分けをしていた。

【4年・社会「自然災害から命を守る」】

迫ってくる危険に対して今どんな対応をすれば命を守れるのかをタブレットで調べて話し合うことができた。

【6年・体育「とび箱運動」】

自分や仲間の目標を達成するために、それぞれのコースで跳んでいるところを動画に収めすぐに再生してアドバイスし合い技の向上を図ることができた。

(3) 第2回研究授業・授業研究会 (R3.11.24)

【1年・国語「なにに見えるかな」】

タブレット上に写真を送り、それを見て思いついたことや想像したことについてペアで話し合うことができた。

【3年・国語「モチモチの木」】

「豆太が真夜中に一人で外に出ることができたわけ」をロイロノート(アプリ)に送り、友だちの考えと比べることによって自分の考えを深めることができた。

【5年・英語「What would you like?」】

日本語で場面にあった言葉を考える際に、英語の言い方を伝え合うことができた。

(4) 第3回研究授業・授業研究会 (R4.7.1)

【5年・理科「もののとけ方」】

【6年・理科「水よう液の性質」】

ジャムボード(アプリ)上に自分の考えをモデル図にして書き込み、グループ内でリアルタイムで共有することができた。

3 研究成果

「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、「専門性をふまえた質の高い課題」と「教科の本質をふまえた振り返りの設定」と「深い学びに迫るICTの効果的な活用」の3点が欠かせないことが分かった。

4 今後の課題

ICTをどのように活用すれば「深い学び」につながるのか、子どもの振り返りからその都度検証していくことが精度を高める。

研究主題 「わかる!」「できる!」を楽しみながら、考え表現する力を高める授業の創造
 ~ユニバーサルデザインの視点を取り入れた算数科における授業改善を通して~

学校名 栃木市立赤麻小学校

校長名 印部稔

1 研究目的

- (1) 学びのユニバーサルデザインの視点からどの子どもにも分かる授業づくりを工夫改善することで、授業力の向上を目指す。
- (2) 本校児童の課題である、表現力の育成(自分の考えを伝え合う力)と共に学ぶ集団作り(個が集団を作り集団が個を育てる)を目指す。
- (3) 算数の基礎となる「数の概念」の領域において系統性を生かした授業提案・研究を行い、授業力の向上を図る。

2 研究内容

- (1) ユニバーサルデザインの捉え
- (2) 授業におけるUD化の手立て
 - ・ 焦点化~シンプルに
 - ・ 視覚化~イメージの共有化
 - ・ 共有化~話し合い活動(考えを共有する活動)
- (3) UD化を意識した授業の流れ(黒板左上が定位置)

つかむ	考える
話し合う	振り返る
- (4) 研究授業及び授業研究会
 指導案展開に、授業におけるUD化の手立てを具体的に明記した。



(5) 学習環境の改善



【地域ボランティアによる棚のカーテンの取り付け作業の様子】

(6) 算数コーナーの設置



(7) 「振り返りシート」等調査・集計・分析

3 研究成果

学校評価(児童)の「勉強したことがよくわかる」では、89%の児童が肯定的な回答であり、「わかる」「できる」を実感する児童が増加した。また、すべての子供にわかりやすいUD化の授業を、教職員が全教科等で心掛けるようになり、授業力の向上につながった。

思考力・表現力の育成に関する学校評価では、児童・保護者共に79%が肯定的な回答であり、児童においては前年度を8ポイント上回った。「自分は思考力・表現力が身に付いている」と感じている児童が増えたことが伺える。

4 今後の課題

思考力・表現力の育成に関する学校評価等において、教職員と児童間の認識の差がある。今後、具体的な手立てを講じて継続的な指導を行っていきたい。

コロナ禍で、話し合い活動が十分行えないことがあった。今後も感染防止対策を徹底していく必要があるため、意見交換の際に、タブレット等のICTを有効活用する等、教職員の指導技術と児童の運用力の向上を図っていきたい。

研究主題 「よりよい学級・学校生活をつくろうとする児童の育成」

～学級会の実践から広げて～

学校名 鹿沼市立北押原小学校

校長名 臼井 孝行

1 研究目的

本校は、全校児童445名の中規模校である。特別活動、特に学級会を中心とした学級づくりの研究に取り組み、教員の意識改革、全校体制で取り組むシステム作りを進めてきた。児童には、学級会の実践から、よりよい学級・学校生活を作ろうとする素地が培われてきている。

その成果を生かし、学級会の実践を教科・委員会・クラブ・学校行事などの場面に更に広げていくことを通して、本校の教育目標である「未来を切り拓く基盤となる力の育成」に迫っていきたいと考え、この研究主題を設定し、研究に取り組むこととした。

2 研究内容

(1) スタンダード型の学級会の実践

話合いの柱を3つ立て、それに従って話合いが進められるようにした。各学級で話合いまでのプロセス、話合い後の実践、実践後の振り返りまで、一連の流れを共有することで本校が目指すスタンダード型の学級会の実践を継続してきた。

(2) 教科・委員会・クラブ・学校行事などへの広がりを意識した活動の実践化

学級会で身に付けた話合いのスキルを教科・委員会・クラブ・学校行事など、様々な場面で生かせるように、常にそれぞれの活動への広がりを意識した指導の充実を図った。

(3) 小中連携推進委員会の充実を図り、系統的な学級会の研究を推進

本校の学級会の実践を北押原地区の小・中学校にも広げ、小学校から中学校までが系統的に学級会活動に取り組めるよう、成果の共有や合同の研修会を計画的に実施してきた。

3 研究の実際

・学校課題推進チームを中心とした理論・具体策立案・検討

・定期的な授業研究会の実施

・自主公開授業研究会の実施

・成果と課題にもとづいた、各活動へのフィードバック

・宮川八岐先生（元文部科学省初等中老教育局視学官）をお招きしての研修会の実施

4 研究成果

学級活動における基本的な考え方やスタンダード型の学級会の実践についての共通理解が深まり、どのクラスでも質の高い学級会が進められるようになった。児童は学級会での経験が、他の教科・委員会・クラブ・学校行事などに生かされ、自治的な活動が進められるようになった。また、低学年でも質の高い学級会が進められるようになってきた。

5 今後の課題

学級会での活動のバリエーションを豊かにしたい。学級会で身に付けた力を学校行事にさらに生かせるようにしたい。

研究主題 SDGs への取組による主権者教育の推進
 ～地域の課題解決を主体的に担う力の育成～

学校名 宇都宮市立城山中学校

校長名 新村 雅司

1 研究目的

本校では、令和元年度より「主権者教育の推進」を重点目標に位置付けて取り組んできた。これを基盤として、伝統行事「城山あったか活動」とSDGsを繋げることにより、地域の課題解決を社会の構成員一人一人として主体的に担うことが出来る力を育成することを目指し、実践的に研究を進めていくことにした。

2 研究内容

(1) 「ふるさと学習」の実施

毎年、地域探索活動として、城山地区の歴史や産業について調べる学習を行っている。この活動を通して、地域の人々の「生き方」や「考え方」、さらには「自分たちの住む地域への思い」を知ることができた。生徒は、自分たちの住む地域の魅力に気づくことができた。

(2) 「城山あったか活動」の実施

令和3年度は、学年ごとに地域貢献活動を実施した。活動を通して感じたことや考えたことを、令和4年度の自治会単位の活動につなげていけるように、課題を設定し、振り返りを行った。



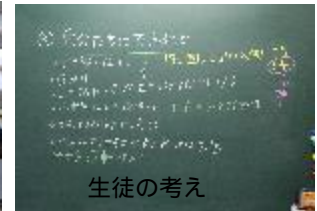
戸室神社参道の清掃

(3) 地域課題についての話し合い

自治会単位で「あったか班」をつくり、地域の魅力と課題について話し合った。さらに、SDGsの視点から、「城山地区がよりよいまちになるために」自分たちに何ができるのかを考えさせた。生徒の主体的な活動となるように、進行は班長・副班長(2年生)に任せた。



班ごとの話し合いの様子



生徒の考え

(4) 自治会長との意見交換

「あったか班」で考えた地域貢献活動の内容を各自治会長に伝えて、意見交換を行った。令和4年度は、各地域のニーズに合った貢献活動が実施できるように、11月の実施に向けて引き続き調整を行っていく予定である。

3 研究成果

一連の活動を通して地域の人々の生き方や考え方に触れ、生徒たちは自分も地域社会の一人であることを自覚することができた。さらに、「城山地区がよりよいまちになるために」というテーマのもとで自治会ごとに話し合い、具体策を模索したことで、地域の課題を自分ごととしてとらえ、自分たちにできることについて真剣に考えることができた。地域の方との協働を通して生徒たちの自己有用感が向上し、積極的に社会に参画していこうとする態度を養うことができた。

4 今後の課題

地域の課題解決を社会の構成員の一人として主体的に担うことが出来るよう、適切な支援を継続していく必要がある。さらに、活動の輪が広がっていくよう、学校園内の小学校へ実践内容の発表を行う予定である。

研究主題 「『考え、議論する道徳科』の授業づくりと、評価のあり方の工夫」

学校名 鹿沼市立南摩中学校

校長名 大貫雅子

1 研究目的

令和元年度より学校課題として取り組んできた「道徳科」についての研究主題達成のための実践の積み重ねを土台としつつ、道徳科の指導の基本方針や特質を生かした学習指導の多様な展開についての教員の理解等の資質能力を向上させることにより、一人一人の生徒の道徳性を育てるための研究を推進する。

2 研究内容

道徳教育についての理論研修

鹿沼市教育委員会指導主事を招聘した校内研修を実施した。道徳教育・道徳科の目指すものや他教科等との関連させた計画的・発展的な指導充実の必要性を再確認した。

道徳性アンケートの実施

生徒に道徳性アンケートを実施するとともに、保護者にも道徳性に関わる子どもへの願いについて学校評価をとおして調査した。

重点内容の選定

の結果とともに、職員の願いを踏まえて重点内容項目を選定した。(向上心、希望と勇氣、克己と強い意志、集団生活の充実)

校内研究授業の実施

管理職を除く全教員による道徳科の研究授業を実施した。普段の生活においてわかっていると信じて疑わない様々な道徳的価値について、道徳科における教材との出会いやそれに基づく他者との対話などを手がかりとして自己との関わりを問い直すことによって価値の理解を深めることができるよう、指導主事の指導や参観者の意見を基に指導の振り返りを重ねた。

年間指導計画の見直し

重点内容項目を軸とし、様々な体験活動や教科等との関わりに着目して、年間指導計画の見直しを行った。

評価の充実に向けた校内研修

「自己を見つめる」「物事を広い視野から多面的・多角的に考える」「生き方について考えを深める」の視点を軸に、学習への取組について評価することを全職員で共有して進めた。

鹿沼市主催研修会への授業提供

指導主事を招聘し、授業づくりから事後指導まで関わっていただき、指導内容を全職員で共有した。



3 研究成果

生徒の実態や保護者の思いを把握した上で、明確な教材観をもって計画的・発展的な指導を重ねていくことの必要性を全職員で共有することができた。重点内容項目と各教科等との関わりに着目して年間指導計画を見直すことで、さまざまな体験活動や他教科等での学びを生かした指導の充実を図れるようにすることができた。

4 今後の課題

学校教育における道徳教育(特に道徳科)の情報を、保護者や地域、地区内小学校等に積極的に発信し、生徒の道徳性をより豊かに養える体制の充実を図りたい。

研究主題 県立学校におけるG I G Aスクールタブレットの効果的な活用方法
 ~ ひとり1台にならない運用上の課題の対応方法 ~
 学校名 栃木県立那須清峰高等学校
 校長名 薄羽 正明

1 研究目的

各校に整備されたG I G AスクールタブレットP C (以下タブレットP Cと省略)の効果的な運用方法を模索することにより、機器の有効活用と指導効果の向上を目指す。

2 研究内容

- ・職員研修(職員会議での使用)
 - ・授業実践(普通教科・専門教科)
 - ・教育実践の紹介・情報発信
- 必要に応じ教育委員会の指導を受ける

3 研究成果

職員研修での使用

タブレットP Cの活用の推進に向けて、職員が率先して使用することが重要であると考え、職員会議(情報セキュリティ基本方針範囲内の会議資料を電子化しタブレットP Cで閲覧)で使用を開始した。

Microsoft Teamsを使用した学科やクラスなど目的に合わせたチームの作成と、資料の配付や課題の回収方法など授業で使える内容を実践した。

当初は不慣れな職員も多かったが、徐々に定着した。



図1 職員会議での使用

○授業実践

事前に用意した課題をデジタルプリントとして Teams で配布し、教材として使用するなど、導入しやすい授業の実践から開始した。

専門教科ではプログラミングや制御実習など高度な授業にも活用した。



図2 授業での様子



図3 実習での様子

○授業実践

令和4年4月に全生徒にタブレットP Cが

配備され、目的とする授業実践が行われた。

各教室には電子黒板も整備され、動画やインタラクティブな教科書、教材の提示に加えて、生徒のタブレットP C画面を電子黒板に表示し共有するなど、タブレットP Cと電子黒板の組み合わせにより、教員の有効活用になった。また、「従来の黒板」と「電子黒板」を併用した授業も以前よりも効果的になった。

更に、従来のノート提出から自分のノートを写真撮影して提出させる方法など、新しい取り組みも実践するようになった。

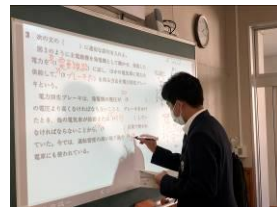


図4 電子黒板



図5 黒板との併用

○教育実践の紹介

授業以外でも、試験的なりモート登校日、始業式をはじめとする各種集会や球技大会などの応援等の参加を双方向リモートで実施し、新しい学校生活の形を創造している。



図6 集会送出し画面



図7 教室の様子

4 今後の課題

普通教室以外のWi-Fi環境の整備(モバイルWi-Fiでは対応できない)や、教員用タブレットP Cを整備することも大きな課題である。

現在の環境での様々な課題に対し、今回の工夫・改善事項を蓄積・共有しつつ、設備の充実にも対応していくことが今後、重要であると考え。

研究主題	生徒・保護者・地域との協働による学校の魅力化・特色化の一層の推進と スクール・ポリシー策定に向けての研究
学校名	栃木県立日光明峰高等学校
校長名	吉川孝昭

1 研究目的

スクール・ミッションを明確にし、生徒・保護者・地域との協働により学校の魅力化・特色化の一層の推進を図ると共に、スクール・ポリシーを策定・公表することで本校の志願者増につなげる。

2 研究内容

昨年度、本校の魅力化・特色化の一層の推進を図るために、「SNS分科会」「広報誌分科会」「学校課題分科会」の3つの分科会を立ち上げることと、特色ある部活動として、eスポーツ部とゴルフ部を創部することが決まった。

3つの分科会は、本校PTAを中心として活動し、本校ホームページの大幅なりニューアル、全国募集を行っているアイスホッケーとスピードスケートの全国クラブチーム向けのパンフレットの作成と発送、割引率が高い東武バスの年間定期券の導入など、今までにない活動を行い、大きな成果を上げた。eスポーツ部は、地元の商工会の協力による創部イベントを開催したり、特別養護老人ホームの利用者とネット交流を行ったりと、活発に活動し、現在ではアイスホッケー部に次ぐ部員数となり、関心を集めている。もう一つの部活動、日光カンツリー倶楽部の全面協力の下で創部したゴルフ部も今年度新入部員が入り、校内にも練習場を整備し本格的に活動を始めた。

また、昨年度検討を重ね、学校教育目標・目指す学校像を改正した。目指す学校像の一つ「一人一人の力を引き出し、自信と意欲を育て

る学校」とするために、今年度、県の事業を活用し、スクールカウンセラーの来校日数を大幅に増やすと共に、ALTの集中指導型配置校の認定、経産省のEdTech事業実証校の認定も受け、これまで以上に生徒一人一人に対し、きめ細やかな対応が可能となった。もう一つの目指す学校像「地域に開かれ、地域に学び、地域と共に歩む学校」とするために、「総合的な探究の時間（日光学）」において、栃木県「未来を創る高校生地域連携・協働推進事業」指定校、三菱未来財団「心を駆動させるプログラム」研究指定校としても決まり、今まで以上に本校教育の充実・深化を図ることができ、本校への注目度が高まることが期待される。

3 研究成果

本校の魅力化・特色化の一層の推進を図り、探究活動の充実や特別支援・教育相談体制を強化すると共に、特色ある部活動を創部し、入学者数や一日体験学習の参加者数の増加につながった。

4 今後の課題

本校の取組は、上都賀地区内には日光明峰高校だよりなどにより、知られるようになり、関心を示す中学生も増えてきている。一方、地区外の学校へは学校訪問やメール送付などを行ってはいるものの、今後どのように広報していくかが課題である。